

大塚雅春

女忍秘抄



春 陽 文 庫

女 忍 秘 抄

大 塚 雅 春



春 陽 堂

ISBN4-394-13304-1



春陽文庫

女忍秘抄

1999年7月15日 新装第1刷印刷
1999年7月20日 新装第1刷発行

著者 大塚雅春

1999 ©

発行者 荒井邦男

印刷 有限会社参陽社

発行所 株式会社 春陽堂書店

東京都文京区白山三丁目六番一三号
営業部 電話(三八一五)一六六六
編集部 電話(三八一五)一八二七
振替〇〇一〇〇一二一六六七

乱丁、落丁のものは本社、またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。

Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

目次

露	策謀の人	北の庄	花といのしし	横臥 が の人	湖上月影	雪原に散る	壁面の花	天変地異	三途 さんず の川	霧に立つ影	花の水葬	比良と小屋	風の狼藉 ろうじやく	敗北の宴	点滴の音
二	二	五	六	七	一〇	一三	一四	一六	一八	二〇	二二	二四	二六	二八	二九

女
忍
秘
抄

露

1

天正元年八月二十九日。

小谷城からさかんに火の粉が舞いあがり、彼我の戦鬪隊形が解かれてからのことである。

小谷城主浅井長政ながまさが自刃した報も、すでに藤吉郎側とうきちろうにははいっていた。いつときの勝鬪かちどきの喧騒けんそうのあとには、攻撃軍藤吉郎側はようやく静かな休止の状態にはいるうとしていた。

もちろん、さきほどまでの怒号も軍の動きもなく、ところどころに集結した兵のかたまりが、赤い入り目と炎上する火煙に映はえて、いかにも静かであった。そして、すべてが終わったむなしさのようなものが、そんな動きのない兵たちのまわりを取り巻いているようだった。

だが、小谷城東北方の小山の突角に立つて、平原のきび畑を見おろしている霧戸兵馬ひようまは、そのときもつともはげしい動きがおこっているのに目をあてていたのだ。

それは小谷城攻防のいかなる激しいいくさよりも、さらに、峻烈しゅんれつをきわめた恐ろしいうごきであつた。

だが——休息にはいろいろとしている将兵たちには、そのうごきは気がつかない。事実、常人に

は見ることのできない一群のたたかいが、そこには繰りひろげられているのだった。

数でいえば十対一。

十名はおそらく藤吉郎側の忍者たちであろう。城内からの落人おちうどをそのきび畑で捕えようとして潜んでいたものらしく、足から頭まできび畑とおなじ色の緑の衣類をまきつけている。

それに対抗しているのは、城内から脱出をこころみたひとりの忍者にちがいない。忍者特有の黒装束で、その片手には、ひとりの人間らしきものをしっかりとかかえ込んでいるのであった。人間らしきというのは、さすがの霧戸兵馬でも、ちょっとその判別がつきかねた。ただあざやかな模様の衣が、右ひだりにうちなびき、ときに空中にはね上がっているようにしか見えないのである。

なびき返るその花模様らしきものは、間断なくきび畑に線を引きながら、忍者のうごきとともにおどろくべき速さで移動をつづけているのだった。まるで、その花模様をかかえた忍者の横背に、それはくつついていのようにしか見えないのである。

「たいした野郎だ……」

霧戸兵馬はひとりごちた。

かれはいまだかつて、人間どものすることにおどろいたことはなかった。みずから「忍」と名のるひとりの忍者に育てられた霧戸兵馬にとって、育て親「忍」は人間というよりも魔神にちかい恐ろしい存在だった。

したがって、ごく最近までは、いわゆる人間と名のつくものにめったに会ったこともなかったし、この世の人々を別種の生きもののごとくにかんじていたのだ。

そのかれが、眼下に展開する死闘をみて、はじめてひとりの人間の忍者のうごきに感嘆したのである。

「これでは、十名でかかっても勝負にならぬのう——」

きび畑は、ただ一陣の風に吹かれて、右に折れ伏し、左に折れ伏しているかのごとく見える。しかし、そのたびに、忍者と忍者との死闘は、あらゆる秘術をかたむけ合って行なわれていたのである。

が——何度めかに、きびの穂波が一方に折れ伏してそこに一条の道をつけたときは、霧戸兵馬のつぶやいたごとく、すでに勝負はついていた。

花模様をかかえたひとりのほうが、きび畑から脱出して、蛇行形だこうの忍者の進行をみせて兵馬のいる方角に飛んではじめたのだ。

きび畑には、十名の新しい首が散乱していた。

霧戸兵馬は微笑した。

二十二歳になるのに、妙に子どもも子どもした微笑であった。しかし、幼時からほとんど比良ひらの山中から一步も外に出たことのないかれの風貌ふうぼうは、そんな幼さのなかにするどいたくましさを感じしものだった。色は黒いが、どこかに山の氣が乗り移ったようなきびしさが、その子どもらしい風貌のなかにやどっていた。

霧戸兵馬が、いま笑いをうかべたのは、かれはかれ自身とはじめて対抗できるひとりの忍者を発見したからである。

霧戸兵馬が花模様をかかえたその人物と行き会ったのは、右手が絶壁になった急斜面の梅林のなかだった。

「やるか」

まず兵馬がきいた。忍者がそんなのんきなことばを吐かれるものではないが、それだけの優越感がそのときの兵馬にはあった。

黒装束の相手は兵馬にちらつといちべつをくれた。

「ほう——」

兵馬の口から思わずそんなためいきまじりの息が吐かれた。黒装束のなかの目が澄みとおって、その眼のなかに兵馬の全身が吸い込まれそうな、そんなたとえようもない深い色をたたえているのだ。

男とは思えないぞつとする目だった。あまりの美貌ひぼうに、兵馬は反発した。

「やるか——」

もう一度いつてから、

「その女、ここへおいていけ」といった。

その忍者がかかえている花模様は単なる衣類ではなく、やはりひとりの女人であった。

術者どうしのたたかいのあとで、もはやその衣類は何条もの筋となって引き裂かれ、破れつく

していた。そして、その破れた衣類のあいだから、二本の玲瓏^{れいろう}たる白い脚部があらわにのぞいていた。

衣類の美しさだけでなく、その脚部のたぐいまれな白さからも、兵馬はなんとなくこれは小谷城の奥方にちがいないと見た。

しかし、相手の忍者はひとことも答えず、ただ次の瞬間から兵馬にむかつてたたかいをいどんできたのだ。

たたかいはじめてまもなく、ふたりのからだは谷一つへだてた向かいの山腹に移動していた。兵馬は、雑木の小枝の反動を利用して、たちまち一本の大杉のこずえ^{おおすえ}におのれのからだを乗せた。そこまで相手をおびき寄せようと思ったのだ。

大杉のこずえでたたかうためには、かかえている女人はおそらく地上においてくるはずだ。

そのすきに、兵馬は女人を奪って逃走するつもりだった。格別女人に用があるわけではない。それを奪うことで、この勝負の決着をつけさえすればよいのだった。

だが――

相手はあがってこなかった。いかなる術をもちいてのぼってくるにしても、兵馬の鋭い五感にはかすかにしてもその動きが伝わってくるはずだった。

さりとて、相手が遠くへ逃げていってない証拠には、その波動がすこしも伝わってこない。すると、

「ハッハッハハ」

という、いかにも人を小バカにした澄んだ笑声が、十数間雑木をへだてた北方の、とてつものな

く高い大杉のてっぺんから聞こえてきたのだ。

相手は、兵馬の作戦を見抜き、兵馬を追わずにさらに高所にのぼり、あいかわらず女人をその右手にかかえて、ゆらゆら揺れているのであった。

兵馬は反転した。そして、いったん地上へむけて落下していくかに見えたが、雑木の枝を飛び移り、最後の小枝の反動で相手の大杉のこずえめがけて飛翔していくつもりだった。

だが、最後の小枝とみたのは、相手がかりに設けたいつわりの一本の添え木にすぎなかった。兵馬は落下しながら、再度反転して大杉のこずえを見上げたが、そのとき、はじめて相手を殺そうと思った。

息の根をとめる以外に、この勝負はつかぬと見たのだ。

3

ふたりの忍者が尾根一つへだてた溪流けいりゅうの石ころの上で向かい合うまでには、さらに何刻かの時を要し、翌朝の日ざしが山の端はを照らしはじめていた。

朝の日を半面に受けたふたりの顔は、さすがに疲労のいろを加えていた。

忍者と忍者との長時間にわたる術の競い合いは、その瞬間瞬間に死が待っていた。死のなかの競い合いであった。

が、そのころになっても、霧戸兵馬はずぶとい眼を相手にむけるだけの余裕はあったが、相手の息は乱れてきていた。

よくやく、勝負のつくときが来たのである。

兵馬はころあいを見はからって、一気に相手のからだに飛びかかっていった。が、しばらくして、だしぬけに、

「女か―」

兵馬はさげんだ。

いまのいままで、この手ごわい忍者が女だと思ったことはなかったのだ。しかし、兵馬の骨太の手にふれたものは、まさしく女であった。

女は無言であったが、そのからだは、いかにもきやしやで、いかにもなよなよしていた。あの鋭い飛翔^{ひしょう}をみせた術者とは思えない、やわらかい女体をそこに息づかせているのであった。

それは霧戸兵馬にとって、いままで一度も出会ったことのない脆弱^{せうじやく}な生きものの感じであった。

「女か……女では殺せんもう」

兵馬はいったが、殺すかわりに、この脆弱な生きものを縛りつけて石ころの上にころがしておくべきだと考えた。

普通の縛りかたでは忍者には通用しない。「千の法」という各関節の自由を奪う縛りかたが忍法にはある。

兵馬は山かつらでその法をもちいた。

この法には、相手を全裸にすることが必要である。

兵馬は女の裸身に格別心の抵抗をかんじずにそれを仕とげた。何かの精神的抵抗があつては、術は通じるものではない。

「名はなんというぞ」

兵馬はきいた。すると、ただひとこと相手は答えた。

「零——」

「しづく？ 笑わせるない」

そんな雨露のような名があつてたまるかと思つた。

ともかく、兵馬はたたかいに勝つた満足感で石ころの上に腰をおろし、女が城内から連れ出した奥方らしい人物に目をあてた。

その女の衣類はいっそうちぎれ飛び、これもほとんど全裸の形で兵馬の前に放置されていた。呼吸はたしかだが、まだその女人は失神状態をつづけていた。

それはめくるめくような大胆な姿態だった。女というものは、失神したときもつとも放肆になり、全身で誘いかける大胆さをみせるものかもしれない。兵馬はそんな女体に、しばらく不思議そうな目をあてていたが、ふと、背後を振りかえって、

ギョツとして立ち上がった。

たつた今そこに縛つたはずの女忍者の姿がかき消えているのだ。

見まわしたが、どこにも見あたらない。

兵馬の目は、やがて、山すその笹むらの一部にとまつた。なにごとそこには起こっていないようだった。あるかなきかの風が、わずかにその笹むらの葉をわたっているだけだった。

だが、その一本の笹の葉のかすかなうごきが、風の方向と反対に揺れているのだ。

兵馬は近づいていって、

「おっ」

と、息をのんだ。

兵馬はその笹の葉むらのなかまで、女体が逃げこんでいつてひそんでいることを確信したのだが、のぞいた目には、横に押しつぶされた笹があるだけで、何も見えない。

いや、何もなければ、兵馬のおどろきはそれほどではなかったのだらう。

そこには、不可思議な現象がおこっていたのである。

たしかに、女の裸身は見えないけれども、兵馬が女を縛ったはずの山かつらは、依然として、縛った形のままそこにはあり、しかも、その空間に、おびただしい露が朝のひかりをやどして浮き出ているのであった。

かずかずの露の揺れひかっている形は、まさしく人間のもつ裸形をかたどったものだった。

「隠身消化の法……」

兵馬はつぶやいた。

「忍」の老人から、忍びのあらゆる手を修得したはずの霧戸兵馬にしても、その法は習わずじまいったし、老人が死ぬとき、

「忍の術はこれですべてじゃ……消化の法なるものは、もはや、この世には存在しえぬ——」
と、言い残したものである。

おのれの息をとめ、おのれのまわりの物体に消化し去る。つまり、まわりの物象におのれを託して、わがうつし身の肉体を透きとおらせてしまうというのが「隠身消化の法」で、それは術のなかの極限とされていた。

が、そのころでは、ただことばとしてあるだけで、現実にもそれを体得したものはないと

いわれていた。

忍びは、究極は、森羅万象と一つになり、その万象におのれのいのちを通わし、万象を制して融通無礙のうごきを得るものだ。

したがって、万象におのれを託し、おのれの肉体を空無として透きとおらせる「隱身消化の法」も考ええられることだったが、じっさいに、それを見るのは霧戸兵馬にははじめてであった。

その法を用いると、透きとおったからだの局所——つまり、女でいえば、乳ぶさだの、腰部だの、股間の奥所だのに、おびただしい露を発生するという。みずから雫と名のつた女は、いま、いみじくもそれを実現しているのであった。

兵馬はひざまずいて、その露の部分に手をあてた。露は冷たく手をぬらし、露をふくんだ女の膚がその下に横たわっていた。

たまらないほど、その膚は冷たかった。

死んでいるとしか思えない膚の冷たさで、いささかの息づきもかんじられなかった。ただ、女体である証拠には、意外なほど盛り上がった張りのある乳ぶさが、そこにあった。そして、それはいかにもなめらかであった。

兵馬は手をすべらして徐々に下方にむけてなでおろしていった。

あるくぼみに来たとき、そこはどよりも多く露をとどめていた。

その露をほらい、兵馬の手はその奥所にふれていった。

すると、空間から、かすかな声がもれ、すこしずつ膚が現実に見えはじめたのだ。「隱身消化の法」がいま解かれつつあるのだった。

顔の全貌^{ぜんぼう}が現われたとき、兵馬はこの世にこれほど美しい女がいようかと思った。

しかし、兵馬にあてた目は、凍りつくような冷たさだった。目だけでなく、その面も冷たいろにおおわれていた。

「切れ！」

雫はいった。

後ろ手のかつらは、すでに何かによってこすり切られていた。いますこし兵馬の来かたがおそれれば、雫は消化の身のままでいずこかに逃走していたのであろう。

「切るわけにはいくまい。そなたはおなごよ。しかも、消化の法を心得ておる……おれに教えろ」
「切れ！」

ふたたび雫はいった。二度とも、そのくちびるから吐かれる短いことばは、風のように冷たかった。

「教えろ」

「切れ」

三度めの雫の切れということばを聞いたとき、兵馬はこの女のからだを奪おうと思った。からだを奪うことで、この女の正体を見破ってやろうと思った。

山かつらを切りはらった。

雫の裸身は自由になり、下半身にくねりをみせた。兵馬を見上げた目は、死人のようにつめたいろだった。そして、

「切れ！」

と、もう一度いった。全裸を見られ、全裸の膚にふれられた雫は、その短いことばしか知らないようであった。

しかし、兵馬は無言のままいどみかけた。

「き……きれ……」

雫はいったが、その声は弱々しく、不意に、顔に赤みがさした。秘めていた女の性が、兵馬のふれていった部分から突然燃え上がってくるようであった。

4

深い木々の青さにつつまれた北の庄の千鳥の間の居室に、柴田勝家は雫をひとり呼び入れた。居室に忍者を呼び入れるのは、武将としては不謹慎きわまりないことだったが、勝家は雫を信用していた。

雫の父、島流四郎もまた柴田家に仕えたたぐいまれな忠実な忍者であった。

何流に属するというわけではなかった。当時——徳川家は伊賀一派をかかえ、織田家は主として甲賀一派をもちいていたが、雫の父は、「流法」と称する独自の忍法をあみだして孤壘をまもっていた。

妻帯はしていなかったし、格別女人ももっていないはずだったが、雫がまだ二歳のときその陋屋に連れ込み、

「これには消え申す忍術を授ける所存にございます」

と、勝家に申し出た。